

「お やじと庭でキャッチボールをし  
たり、周りの友達と野球をして  
遊んだりしていたので、その延長で自  
然と野球を始めました」  
千葉ロッテマリーンズで活躍する小  
林投手は、大月市真木で過した子供  
時代をそう振り返る。小学一年時から  
少年野球チームに入り、大月西小  
学校、大月東中学校と野球一筋の  
少年時代を送ってきた。高校進学  
の時には甲府の強豪校からも声  
が掛かる選手に成長していたが、  
中学の部活仲間や他校でライバル  
だった選手たちと一緒に野球で地  
元を盛り上げようと、都留高校に  
進学する。朝六時から夜九時まで  
練習が続く高校時代。「授業中こ  
つそりと睡眠をとって体力回復に  
充てていました。でも集中力はあ  
ったし、要領も良いほうだったので  
成績は良かったですよ」と笑う。

「そこまで野球に打ち込めたの  
はやっぱり野球をするのが楽し  
かったから。これが野球を続けて  
こられた一番の理由ですね」と少年の  
ように目を輝かせて語ってくれた。し  
かしプロ野球選手になることまでは  
あまり意識していなかったという。そ  
れが大きく変わるきっかけは、大学卒  
業時に訪れた選択だった。プロ球団  
からも話があったけど、『プロ野球にい



る大事な時間になった。練習へのスタ  
ンスも、それまでの「やらされている」も  
のから「自分の意志でやる」ものに変わ  
っていった。「誰かに指示されてやる練  
習と自分で上手くなりたくてやる練  
習では、同じことをやっても効果が全  
然違います」と熱く語るのは、社会人



自分のことをちゃんと見ていてくれた  
人がいたことがすごく嬉しかったで  
す」と入団を決めた当時を振り返る。  
マリーンズに入団してからの活躍は、  
多くの人が知るところだ。しかし輝か  
しい戦歴も、常に「過去のこと」とい  
う。打たれたことも抑えたことも、前

取材中、都留高校の甲子園出場決  
定の報せが入ると、「マジですか?!!」と  
自分のことのように喜んでくれた小林  
投手。後輩たちの目標であり続けるた  
めにも、チームの優勝に向け自身最高  
のパフォーマンスを発揮できるよう、  
今日も全力で野球に取り組んでいる。

れてやるよ』って感じだったんですよ。  
欲しいとはいわれても、評価は低い微  
妙な線。じゃあいいです、と断りました。  
どうしても欲しいと言われるようにな  
って、見返してやるうと思つて」。  
二年後にはプロに進むと決めて飛  
び込んだ社会人リーグは、今につながる

リーグでの二年間が野球選手として一  
番成長した時期だと感じているから  
だ。  
社会人リーグ時代はそれほど目立  
つ選手ではなかったという小林投手。  
「そんな自分をマリーンズは一位指名  
で取りたいと真つ先に言ってくれた。

MASAHIDE KOBAYASHI

のことは前のこと。意識したら自分の  
パフォーマンスができないので、常に目  
の前の試合に集中するようにしていま  
す」  
そんな小林投手の好きな言葉は「臨  
機応変」。「その時その時の状況に応じ  
てベストを尽くすことが大事なんです。  
特に抑え投手は先発と違って自分  
で計画が立てられないから、ゲーム  
の流れの中で起こったことに全力  
で対応していくしかない」と語る。  
現在、山梨に戻る機会はありません  
ないが、毎年一回は必ず地元で野球  
教室を開いている。「山梨は僕を作  
ってくれたところ。高校卒業までの  
十八年間、ふるさとの多くの人と  
関わって育った。その中で、山梨の  
人が受け継いできた文化や考え方  
などを教わった。体も山梨の恵ま  
れた環境の中で育ててもらったと  
思っている。だから山梨は僕の中に  
ある。いや、むしろ『僕自身が山梨  
そのもの』だと思っています」と故  
郷・山梨への思いを語ってくれた。

# 僕が育ったところ。 僕自身が山梨そのもの——小林雅英 投手



## YAMANASHI People 甲斐のひと、インタビュー

### 小林 雅英

1974年大月市生まれ。千葉ロッテマリーンズ投手。大月西小学校、大月東中学校、山梨県立都留高等学校と進学し、日本体育大学から東京ガスを経て、1998年ドラフト1位(逆指名)で千葉ロッテマリーンズに入団。最多セーブ投手('05年)、交流戦MVP('06年)、月間最優秀選手('01年6月、'02年7月)などの賞とともに、数々の記録も持つ。2004年アテネオリンピック日本代表となり、銅メダルを獲得。